

書評

樋口直宏 著

『批判的思考指導の理論と実践』

— アメリカにおける思考指導の方法と

日本の総合学習への適用』

桑 原 隆*

本書は、樋口直宏氏が筑波大学より博士（教育学）の学位を取得された論文である。論文に一部修正を加え、日本學術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を受けて刊行された著書である。著書の題名にみるように、「批判的思考」に焦点を当てた大著である。

考える力の育成、すなわち思考力の育成は、時代を超えた不易な教育の課題であると同時に、思考力のなかでもとりわけ批判的思考力の育成は、現代及びこれからの21世紀において、学校教育が果たしていくべき大きな課題である。グローバル化はますます進展していくであろう。国際化や情報化も、これまでに経験したことのない速さで進んでいる。21世紀は知識基盤社会とも言われており、知識や情報の重要性が高まっていくことは明らかである。このような動向において大切なことは、知識や情報を表層的に受容することではなく、まさに「批判的」に摂取し、新たな知識等を再構成していくことである。そのような主体的な力を児童・生徒に育てていくことである。本書はこの大きな課題に対して、アメリカにおける批判的思考の研究を解明しながら、日本における批判的思考の実践を提案しようとする意欲的な研究である。

筆者は批判的思考を、「ある主張や事象に対して問題点を感じとり、根拠となる情報にもとづいてその構造や状況を分析、整理しながら、妥当性を評価するとともに、解決策や代案を含む判断、意思決定を行うこと」と定義している。この定義から批判的思考の特徴、あるいはキーワードを取り出すとすれば、「問題点」の気づきや明確化、「妥当性」の評価、「判断や意思決定」ということになる。いず

*早稲田大学

れの段階も批判的思考の過程において重要であるが、とくに「妥当性」の評価という段階において、様々な批判的思考の技能が駆使されていることになるであろう。したがって、批判的思考としてどのような技能が必要なのか、その体系化が課題となってこよう。

上記の定義にもとづき、筆者は本研究の課題を以下の四点に整理している。

- ① アメリカにおける批判的思考研究について、歴史的に究明しながら、批判的思考という概念および特徴を明らかにすること。
- ② 主要な批判的思考研究者の理論を取り上げながら、思考技能およびその指導原理について考察すること。
- ③ 批判的思考の教材構成および指導方法について検討すること。
- ④ 批判的思考の単元を開発し、その単元の実践と評価を検証すること。

以上の課題は次のような論文構成で考究されている。(節以下は省略)

序章 研究の目的と方法

第1章 アメリカにおける批判的思考研究の展開

第2章 批判的思考の概念と指導原理

第3章 批判的思考における教材構成と授業実践

第4章 日本における総合学習への批判的思考指導論の適用

終章 研究の成果と今後の課題

先の①～④の課題と、章の構成が対応しており、理論から実践論へという論の流れが大変分かりやすい論文構成になっている。論文の副題は、「アメリカにおける思考指導の方法と日本の総合学習への適用」となっており、論文の第1章から第3章にかけては、アメリカにおける批判的思考論の究明が、歴史的時間を追いながら緻密に分析され考察が行われている。本書巻末の参考文献には、398頁から414頁まで18頁にわたって英語の文献が整理されており、その数は膨大である。この膨大な書籍・論文を緻密に分析し考察しており、アメリカにおける批判的思考の理論的究明だけでも、独立した論文として価値をもっている。加えて、アメリカの研究を土台にしながら発展的に、第4章では日本における批判的思考指導の在り方について提案している。総合学習における単元開発とその実証的研究で、本論文をいっそう充実したものにしていく。

第1章では、アメリカにおける批判的思考運動がどのように歴史的に展開されてきたのか、その展開過程が緻密に整理され考察されている。本論文では批判的

思考の起源を、1910年に『思考の方法』を著したデューイにまで遡って明らかにしている。1910年以降、1920年代から1930年代にかけて、第一次世界大戦とも関係して、プロパガンダ運動が批判的思考の発展を促進したことも解明している。興味深い解明である。プロパガンダ運動は、現在のメディア・リテラシーとも理解できるかもしれない。さらに、1950～1970年代、1980年代、1990年代以降と各節に分けて、批判的思考研究がどのように進展してきたのかを、克明に浮き彫りにしている。1980年代から1990年代にかけて批判的思考への関心や重要性への意識が高まり、多くの研究が創出されたという。その背後には『危機に立つ国家』（1983）にみられるように学力低下という危機感が根底にあったことは著者が指摘する通りであろう。また、認知論等の学問分野での研究が進展し、批判的思考の研究が深められていった。1980年代の動向で評者が注目したいのは、批判的思考の要素である技能を抽出し、体系化しようとした研究の考察である（第1章第3節）。批判的思考指導のカリキュラムを作成して実践していくためには、その技能を明らかにして体系化していく必要があるからである。この課題は、第2章以降に引き継がれている。

第2章では、批判的思考の概念と指導原理について、デューイ、エニス、タバ、ポールの理論を考察している。第1章同様第2章においても、批判的思考研究の原点としてデューイが取り上げられている。評者は昭和38年に東京教育大学教育学科に入学したおり、1・2年生の教育原理の授業でデューイの『学校と社会』が必読文献のテキストであったように記憶している。当時の教授の方々の講義・演習はドイツ教育学に加えてデューイ論が多かった。その後、評者は1989～1990年に文部省の在外研究員として、アメリカのアリゾナ大学のケネス・グッドマン教授のもとで研究する機会を得た。グッドマン教授は言語心理学者で、ホール・ランゲージ運動の創始者であるが、受講した大学院の講義で頻繁に取り上げられていた人物は、ピアジェ、ヴィゴツキーとデューイであった。すでに四半世紀前の体験であるが、その時、デューイは時代を超えてアメリカにおいて枢要な教育学者・哲学者になっていることを実感した。個人的な回想であるが、樋口氏の本書を読みながら、改めてデューイの偉大さや影響力について再認識した次第である。

デューイに続いてエニス（第2節）、タバ（第3節）、ポール（第4節）の理論が考察されている。いずれの節も、独立した小論文としてそれぞれの人物の主張が手際よくまとめられている。評者自身の関心から率直な感想を言えば、第1節

のデューイの考え方が、エニス、タバ、ポールにどのように発展的に引き継がれていっているのか、デューイに言及しているのかいないのか、といったことについて、各節の中、あるいは第2章の最後あたりにその解説があるとより説得力があるように思われる。読者の読みに任されているところもあるが、節と節との間の関係、特に前節との関係をつなぐ説明や、主張の違いなどについて整理された説明があると、いっそう立体的で分かりやすくなるように思われる。

エニスにおける批判的思考の要素（技能）の整理、タバにおける「問い」の理論及び授業分析の方法の考察、ポールの多重論理を重視した批判的思考および「対話的思考」の解明など、第2章においても重厚な考察が展開されている。エニスは、批判的思考の要素（技能）を詳細に提示しており、批判的思考の要素（技能）に関してその後の研究に大きな影響を与えてきている。その詳細な要素（技能）についても、特徴などの確に整理されている。エニスのFRISCOアプローチ（焦点・Focus, 理由・Reasons, 推理・Inference, 状況・Situation, 明確さ・Clarity, 概観・Overview）にも綿密な考察がなされている。

タバは社会科を中心とした単元の開発を行っておりその授業分析の考察は、第4章の単元開発の実証的研究において、その手法が活かされている。タバにおける「問い」の理論およびポールの「対話的思考」の解明は、批判的思考を実際に指導していく場合の重要な課題となってくるものであり、指導原理として重要な示唆を与えるものである。また、唯一の答えに到達できるような課題や方法ではなく、オープンエンドになるような課題や方法を提唱していることも明らかにしている。

「対話的思考」については、ポールの考えを筆者は次のようにまとめている。

現実の問題は複数の問題が結合された「多重論理的 (multilogical)」なものであり、対立する観点を自分の考え方の枠組みと照らし合わせるような対話的やりとりが必要である。そして授業を進めるにあたっては、対話的思考を導き出すために教師の「問い」を重視するとともに、教室や学校を批判的思考への助けとなるような環境にすることが求められる。教師はそのために、内容の伝達者であるよりも、質問者になるべきであると考えている。

ポールの特徴は、現代社会は複雑に価値などが絡み合っている多重論理の社会と捉えていることである。したがって、そのような諸問題は、単一論理による方法ではなく、複数の考え方の枠組みを検証していくことが必要であり、そのため

の方法として「対話的思考」を重要視している。そして、対話的思考を導き出すような教師の「問い」が重視されている。タバおよびポールの「問い」に関する著者の考察は、実践論として重要な意義をもっている。

批判的思考の要素（技能）において、エニス、タバ、ポールの三者に共通してみられることで評者が注目しておきたいことは、批判的思考の要素や技能的な能力に加えて、情意的要素（性向、態度、精神的特性、等論者によって使用概念が異なる）を必要不可欠な要素として位置付けていることである。三者において使われている用語や、その依拠する背景や内容が微妙に異なることは言うまでもないが、三者が共に情意的要素を、批判的思考の技能や能力としてその体系に組み込んでいることの指摘は、批判的思考の実践論として重要な意義をもっている。著者が整理した、ポールが主張する精神的特性は、以下のようなものである。

- 1) 精神の自立 独力で思考する自立的思考、2) 知的好奇心 世界について疑問を持つ性向、3) 知的勇気 否定的な感情や考えに対して真剣に向き合おうとする意識、4) 知的謙虚さ 私たちの知っている知識の限界についての意識、5) 知的共感 他者の立場に自分を置く意識、6) 知的誠実さ 知的道徳の基準が正しいものである必要性の意識、7) 知的忍耐 真実を追求する必要性の認識、8) 推理に対する信頼 自由に推理することや自分の結論にいたることの奨励、9) 公平さ すべての観点を同じように扱う意識

批判的思考の教育は、知的な分析的技能や能力に加えて、このような情意的要素をも組み込んで教育していく必要があることを、エニス、タバ、ポールの考察によって明らかにしている。「問い」の在り方とも関係して、この情意的要素の抽出及び体系的な位置付けは、批判的思考の実践の開拓に対して、重要な価値や意義をもつものである。

本著書の第三の課題は、批判的思考の教材構成および指導方法について考察することである。この課題は第3章において、アメリカにおいて開発された代表的な思考教育プログラムを分析し、考察されている。ウェールズらの『思考技能：選択』の事例（第1節）、Critical Thinking Press and Software 社から刊行されている教科書・指導書の事例（第2節）、スタンバーグの三頭理論の事例（第3節）、ファッションとスウォーツの事例（第4節）を取り上げて、どのように教材が構成されているかということを中心に、丹念に分析し考察が行われている。思考の要素・技能との関係において、どのような教材が作成され、どのように指導の方法

が提示されているかということについて、各事例ごとにその特徴や問題点などが考察されている。批判的思考の技能をどのように組み込んで教材を作成したらいいのか、学習者に対してどのような話題やテーマを教材化したらいいのかといった問題は、批判的思考教育を実践していく際きわめて重要な課題であり、本章の事例研究はその課題に豊かな示唆を与えるものである。

本書の特徴の一つは、第1章から第3章におけるアメリカの緒論についての詳細な考察に加えて、日本における批判的思考の実践的提案とその検証である。これが第4章である。筆者自身が単元開発にも関わった東京都内の公立小学校・中学校の事例を中心に提案と考察が行われている。文部科学省の指定研究開発学校で、「系の学習」として独自のカリキュラムを開発している学校である。「系の学習」は五つの系から構成されており、筆者はその五つの系のうち、「社会教養系（社会、道徳、特別活動）：批判的思考、社会的技能、人間関係」の単元開発や実践指導に関与している。

批判的思考の具体的な技能として、「問題発見に関する技能」→「問題の構造化や分析に関する技能」→「判断・意思決定に関する技能」を位置付け、さらに最初の「問題発見に関する技能」では、「知的誠実さ」「公平さ・謙虚さ」などを位置付けている。ここには、第1～3章で考察されたデュエイ、エニス、ポールに関する研究が活かされている。

小学校低学年・中学年・高学年及び中学校の四段階に分けて、実際に開発された主な単元が一覧表で紹介されている。そのうち「町のカラスは住みやすいか」（小学校中学年）、「アイスクリームの違いを見つけよう」（小学校高学年）、「20年後のわたしたち」（小学校高学年）、「『あの子をさがして』から世界へ」（中学校）の四つの単元については、その具体的内容が紹介されている。先にも述べたように、技能を包み込んで、どのような話題・トピックで教材を作成したらいいかという課題は、批判的思考の実践においてきわめて重要な問題である。この点において、児童生徒に興味・関心を喚起し、しかも日常生活の問題と関係づけた話題・トピックが設定されており、示唆に富んでいる。「町のカラスは住みやすいか」の実践については、第2章で考察したタバの授業分析の手法を応用して、授業記録の丹念な分析と考察が行われている。

今後の課題としては、批判的思考の概念及び技能が、小学校・中学校・高等学校を通して、教育論としてどのように系統化・体系化できるかという問題がある

であろう。批判的思考の体系的なカリキュラムの作成である。第4章は指定校における総合学習としての提案及び考察であるが、一般校においてどのような時間帯、すなわち教科及び総合的な学習の時間等との関係などを、さらに検討していくことが求められよう。21世紀の批判的思考教育のプログラムや実践の開拓に多大な示唆を与える好著である。

樋口直宏著

『批判的思考指導の理論と実践—アメリカにおける思考指導の方法と日本の総合学習への適用』

学文社，2013年，6,500円